



News Letter no. 23

ニュース・レター

日本図書館協会児童青少年委員会 2020. 6.15

ISSN 2188-6067

<目次>

■ IFLA

1. 世界図書館情報会議・IFLA 第 85 回アテネ大会 報告 護得久えみ子
2. 古代と現代が交錯する都市“アテネ”探訪 依田和子

■ 令和元年度全国公共図書館研究集会（児童・青少年部門）

報告 都道府県立図書館児童サービス担当者会 浅見佳子

■ 活動報告

第 105 回全国図書館大会（三重大会）第 4 分科会児童サービス（1）（2）報告 島 弘

■ IFLA

1. 世界図書館情報会議・IFLA 第 85 回アテネ大会 報告

○大会の概要

世界図書館情報会議・IFLA 第 85 回アテネ大会（以下：第 85 回 IFLA アテネ大会）は、2019 年 8 月 24 日から 30 日まで、ギリシャ・アテネで開催された。大会参加者は、約 140 ヶ国 3600 人。大会テーマは“Libraries; dialogue for change”（図書館；変化への対話）。

○児童・ヤングアダルト常任委員会

会期中に、2 回の常任委員会をおこなった。今期からの新委員と、今期で退任する委員もあわせて 14 ヶ国 16 名が出席した。（ノルウェー、スウェーデン、デンマーク、ドイツ、ルーマニア、フィンランド、イタリア、アメリカ、ロシア、バングラデシュ、シンガポール、オーストラリア、日本）今期は委員長・事務局長の改選の年となり、委員長はノルウェーのヨールン・シスタッド、事務局長はアメリカのマリアン・マーテンズに決まった。

委員会では、サテライトミーティング（8 月 22 日にセルビア・ベオグラードで開催、参加者 70 名）の報告や、現在行っている「絵本で知る世界の国々」「姉妹図書館」「ベスト・プラクティス」の進捗や今後の方針などを話しあった。また、IFLA 本部が 2019 年から 2024

年までの戦略計画を発表したことにともない、その4つの柱にそった2年ごとの行動計画として、どのようなテーマを中心にするか検討した。

事例発表では、「児童・YA図書館でのデジタルサービスの事例と挑戦」として、4つの発表があった。ドイツからは、ベルリン児童図書館での、プログラミングと従来の読書推進を組み合わせた取組みが紹介された。読む力を育てることも電子メディアの使い方を教えることも、読書推進の一環と位置づけ、資料提供や様々な催しを行っている。今回紹介されたのは、『オズの魔法使い』をもとに、登場人物の絵をかき、ロボットにつけて、お話の通りに動かすにはどうしたらいいか、子どもたちに考えさせるという小学生向けのプログラム。図書館員が指導するが、学校で学び続けられるように、教員用のプログラムも用意し、クラスごとにロボットを借りることもできる。

スウェーデンからは、3市の図書館が連携して開発した6歳～12歳の子ども向け電子書籍アプリが紹介された。どんなタイプの本が読みたいか（こわい本、ファンタジーなど）、何歳向けを探したいかを選択すると、図書館員の解題付きでおすすめの本が表示される。関連する「もう少しかんたんな本」「もっと長い本」「この本と同じくらいの似たような本」も示される。

ほかに、ロシアのYA図書館での利用者がスマホから使えるサービス（こちらは、アプリではなくショートメールやWebサイトを使用）、ノルウェーからは全国の図書館で行う夏の読書キャンペーンを、デジタル化（専用Webサイトを作り、子どもたちはそこに読書記録や、キャンペーンのごほうびを貯める。読むのは紙の本でも可）した事例が紹介された。

（各発表の概要は85回IFLAアテネ大会のWebサイト・8月29日 session274で閲覧可能 <https://2019.ifla.org/conference-programme/> 2020年5月5日最終アクセス）

○図書館見学

アテネ市立子ども図書館は子ども文化公園の中にあり、倉庫を再利用して2016年に開館した。0歳から6歳向けと、6歳からYA向けの2棟にわかれており、それぞれ、専属の図書館員がいる（市の図書館員が配置される）。利用するには、それぞれ登録が必要。

・0歳から6歳向けの部屋

蔵書数は2500冊ほど（そのうち多言語100冊）、貸出は、子どもは2冊1週間（延長は1週間まで）。保護者は、子どものカードを使って、さらに1冊借りられる。（先生や児童心理学者など、仕事で子どもの本を必要とする人は、特別のカードを作れる）書架は0歳から3歳向けと、3歳から6歳向けに大きくわかれ、本の背にはられたラベルでも



区別できるようになっている。保護者向けに、子育てや児童心理に関する本も少しそろえてある。部屋の中にはほかに、子どもが自由に遊べるスペースや、18 ヶ月までの子どもが食事をできる椅子、授乳・おむつがえの場所もあった。

・6歳からYA（16歳前後）向けの部屋

蔵書数は3500冊ほど。貸出は、子どもは2冊15日間（延長は1週間まで）。こちらの部屋でも、保護者は子どものカードで1冊借りられ、先生は特別のカードを作れる。フィクションの書架は、対象年齢で4段階に分けてある（6～9歳、9～12歳、12歳～YA、YA）。それぞれのグレードでは、翻訳作品→ギリシャの作品の順に著者名順に配架。ノンフィクションはDDCに従ってならべられている（神話などもこちらに入る）。ボードゲームもあるが、これは館内利用のみ。小学校からのクラス単位の訪問をよく受け入れており（だいたい1週間に2クラス）、専任の職員が、本に関するゲームや工作をさせている。

書架には『小さい魔女』『やかまし村の子どもたち』『クマのプーさん』など、日本でもおなじみの本のギリシャ語版もあった。



（護得久えみ子）

■ IFLA

2. 古代と現代が交錯する都市“アテネ”探訪

2019年8月24日から30日までギリシャのアテネで開催された第85回IFLAアテネ大会参加してきました。会議の合間をぬって、地下鉄・バス等で巡ってきた3種類の図書館とアクロポリスを紹介します。

①新国立図書館

1829年に建てられた歴史的建造物の旧図書館から場所も変えて2018年に新国立図書館が新築されました。広い敷地にカヌー遊びもできる人工の運河と公園が広がり、屋上からは海も臨めて、アテネ市街が360度見渡せます。地下鉄のシンタグマ駅からは無料のシャトルバスが往復しています。館内の本屋さんでギリシャ人作家の絵本を店員さんに教えてもらって、3冊買ってきました。日本に留学しているギリシャ人の友人に英訳してもらったので、日本語の私家版を作ろうと思っています。



②「子ども文化公園」内の図書館

平屋建ての建物の中央左の入口を入ると乳幼児図書館、右の入口からは小学生以上向けの図書館に入ることができます。2016年に子ども図書館に特化して創設されたようで、小規模ですが、図書館員は熱意があって親しみやすく、資料も充実しているので、子どもが安心して利用できる場になっていると感じました。小学生以上向けの書棚には「ギリシャ神話」シリーズがずらりと並んでいて、子ども達もよく借りていくそうです。



③アギア・パラスケビ公共図書館

大会概要の「図書館訪問」紹介文に誘われて申し込みをしたところ、集合場所に行ってみると参加者は私を含めて2人でした。そのため職員と運転手兼通訳の案内人の方々と話す時間が十分あって、充実した時間を過ごすことができました。帰りに画集をもらってきました。

この図書館は、画家アレコス・コンドポロス（1904－75）の自宅とアトリエを家族から寄贈されて1982年に設立。アギア・パラスケビ区からも運営費を得ていますが、評議委員会が独自に運営しています。児童書も豊富で、読書会・音楽会・演劇上演・創作活動・絵画制作など芸術と文化活動を多数実施していて、近隣住民の集いの場となっているようでした。画家の作品を展示している小さな美術館も併設しています。こんな図書館が身近にあったら楽しいだろうと、羨ましくなりました。

④アクロポリス

現在残っている古代ギリシャ遺跡が建設されたのは、紀元前450年頃とのことです。丘の上に聳えるアクロポリス神殿は今も修復が続いていますが、歩いて登ることができ、さらに史蹟内ではコンサートが開催されるなど、アテネ市民だけでなく世界中の人々が古代神話の世界に触れることができる様になっています。隣接するアクロポリス博物館ではギリシャ神話の主人公たちの彫像が立ち並び、アテナやポセイドンなど神話に登場する多数の神々に出会うことができます。

今回のアテネ探訪は、ギリシャ文明の奥深さを体感できた貴重な機会となりました。



付記

ギリシャに行ったら‘ドルマス／ドルマデス’をぜひ食べたいと思いつけていました。今回アテネの街角の料理屋さんで見つけて、念願がかなって大満足。おいしかったです。



(依田和子)

■ 令和元年度全国公共図書館研究集会（児童・青少年部門）
報告 都道府県立図書館児童サービス担当者会

研究集会終了後の11月29日(金)午後、恒例の都道府県立図書館及び政令指定都市の児童サービス担当者の意見交換会を開催しました。改装工事中のところ、会場を提供していただきました島根県立図書館様に感謝申し上げます。出席者は政令指定都市の担当者7名、日本図書館協会児童青少年委員会委員3名を含む21名でした。

議題として、2018年にオープンしたオーテピア高知図書館の国内初の県市共同でのサービス運営について、また、都道府県立図書館の特徴的な役割である市町村支援、先進事例への取り組みといったサービスを取り上げました。

1. オーテピア高知図書館

高知県立図書館のご担当者から、開館後の児童サービスの現状や県と市の役割分担について伺いました。開館を機に児童書全点購入とその資料の団体貸出がスタートしました。児童書の全点購入は、県内図書館等への資料選定の支援が目的です。出版から1年後の4月から9月にかけて、オーテピアで展示をしました。その後、2019年10月より高知県内のブロックごとに3つの図書館で読み物、知識の本、絵本にわけて巡回見本展示が行われます。

県は県内市町村図書館のバックアップ連携事業を行い、市は市内学校図書館等の支援を行いつつ、カウンター業務では県2名、市2名の両方の職員が一緒にローテーションに入っている担当しています。選書は県と市とそれぞれの選定会議で行いますが、随時に相談できる体制であるとのこと。絵本以外は県の蔵書、市の蔵書を一緒に排架していて、県の絵本は児童図書研究コーナーに画家順に、市の絵本は子どもコーナーに文の作者順に排架されています。

児童書の全点購入をしている図書館は高知県立図書館の他、参加館では滋賀県立図書館、静岡県立図書館の2館でした。静岡県立図書館では16歳以上に利用を限定し、年間600万円の予算措置を行っています。

2. 研修事業

司書教諭や学校司書を対象とした研修を都道府県立図書館職員が担当することも多くなっています。司書教諭、学校司書にはそれぞれ固有の業務があるのでカリキュラムの組み方が難しいという声も聞かれました。各図書館、何年もかけてカリキュラムを練り直しながら、作成されているようです。主催も都道府県の学校図書館を担当する指導主事、学校図書館支援センター等様々であり、開催は年1回から数回のところが多く、テーマは「レファレンスインタビュー」「ブックトーク、本の内容について」「夏休みの自由研究」「学校図書館応援コーナー」「調べ学習で使える本」といった実際の資料提供につながる実践的な内容が多く聞かれました。

3. 障がいのある子どもたちに向けたサービス

高知県立図書館でのバリアフリーコーナーの設置のほか、他県からも、重症児センターや支援学校への訪問、県内学校への郵送貸出の事例等、他施設との連携事業が紹介されました。LLブックの収集も、マルチメディアデージー等と共に充実を図っている図書館が多く、東京都立多摩図書館ではLLブックリストを作成しています。

4. ユニークな行事への取り組み

子ども向け検索講座、夏休み宿題お助け講座、書評漫才、ジュニア司書、子ども向けスタンプリー、こわいおはなし会などが紹介されました。このような催し内容はテキストベースでホームページにアップしたり、関連図書のリストをレベル分けして展示したりすることで参考例の共有と活用促進が図られています。利用者が主体的に関われるような企画とするための立案能力が求められているという意見もありました。

5. 学校支援

学習支援のための図書セット等の貸出などを行っているところでは、学校指導要領や教科書ごとの単元内容の変化に気を配り、内容変更に対応していました。

6. 多文化サービス

日本語と英語が併記されている本のリストを作成した、日本語を外国の方に教える本などの問い合わせをよく受けるといった事例が紹介されました。

次回、令和3年度全国公共図書館研究集会（児童・青少年部門）の開催地は岩手県です。

（浅見佳子）

■ 活動報告

1. 第105回全国図書館大会（三重大会）

第4分科会児童サービス（1）（2）報告

日時：2019年11月22日

会場：三重県総合文化センター

第4分科会児童サービス（1）は、22日の午前に開催されました。ここでのテーマは「つながらず読書」です。基調報告は「本との出会いをつなげていくためのいくつかの試み～創る側から・手渡す側から～」と題し、ノートルダム清心女子大学教授の村中李衣さんのお話で

した。村中さんは自作を紹介しながら、本を通して人と触れ合うブックコミュニケーションの大切さを話されました。

次に、報告の一番目は、山陽小野田市立図書館長の山本安彦さんです。テーマは「お腹に赤ちゃんがいるときから切れ目のない本との出会い」で、自館で行っている44に及ぶ事業を紹介されました。

二番目の報告は、多気町立勢和図書館館長補佐兼司書の林千智さんです。「赤ちゃんからの図書館サービス～子どもの育ちを支え成長をつなぐ」というテーマで、自館で行われている乳幼児サービスが報告されました。行政の他機関との積極的な連携が印象的でした。

午後は、第4分科会児童サービス(2)です。会場は休館日の三重県立図書館1階開架室に椅子を並べて行われました。「図書館は本当に子どもたちの居場所になっているのかー図書館司書の役割とはー」という大きなテーマ設定です。基調講演は、子どもの本専門店メリーゴーランド代表の増田喜昭さんで「子どものしあわせと読書」という題でお話をされました。増田さんは書店経営をしながら出会った谷川俊太郎さん、あべ弘士さんらとの交流を紹介されました。増田氏の言われた「人の半分は本、あとの半分は旅(人との出会いや家族)」と言われた言葉が印象的でした。

講演会の後には、増田喜昭さん、林千智さん、坂倉加代子(NPO法人四日市男女共同参画研究所代表)さんによるディスカッション「図書館は本当に子どもたちの居場所になっているのか」が行われたのですが、時間の都合で私は参加できませんでした。

久しぶりの地方大会です。三重ならではの報告が聞け、とても良い会であったと思いがら帰路につきました。

(島 弘)

News Letter no.23 ニューズ・レター

編集：鹿野詩乃、高橋樹一郎

発行者：島 弘

発行：日本図書館協会児童青少年委員会

日本図書館協会児童青少年委員会事務局 川下美佐子

Tel.03-3523-0816/Fax.03-3523-0841

E-mail:jidou@jla.or.jp